

小鮎川のかっぱと白龍

こあゆがわの かっぱと はくりゅう



作:近藤せいけん



相模の国の飯山というところに、小鮎川という、とてもきれいな水がながれる川があり、そこにはかっぱの親子がすんでいました。

小鮎川とよばれているように、沢山の鮎がとれる、豊かな清流です。

かっぱの親子は父親の次郎かっぱ、母親のさち、息子の龍、娘のあい、の四かっぱで仲良く、生き生きと暮らしていました。

その年は春から雨が降らず、小鮎川の豊かな水も、日一日、流れが細り、鮎やうぐい、はやも上がってこず、食べ物が少なくなってきました。

この飯山村の付近の百姓衆も、困っていました。

五月の田植えの季節になっても、一滴の雨も降らず、田畑はカラカラに乾いて、草一本、生えない、日照りが続きました。

次郎かっぱの親子は、川の水がないと、生きていけません。

さち「このまま、雨が降らないと、食べものがなくなって、生きてゆけない」

次郎「そうだな、こんなひどい、長い、日照りは初めてだな」

あい「お腹がすいた、鮎が食べたい」

龍「あい、もう少しがまんしろ」

あい「でも、にいちゃん、お腹すいたよ」

次郎「ああ～なんとかしないと」

さち「そう言ってもね～どっこいしょ」

「それじゃ、畑に行って、枯れかけた、ダイコンを取ってくる。

あい、お前も行くか」

あい「ううん、いいよ、いかない。腹すくもの」

そこえ、飯山村の庄屋 吾助が村の衆とやって来た。

すぐさま、口を開いた。

「かっぱの次郎どん、頼みがあってやって来た」

「今年は春から、一滴の雨も降らず、田畑はカラカラに乾いて、草一本生えない」

「五月だというのに、田植えが出来ない、このままでは飢え死にってしまう」

「畑の青物も枯れてしまい、食べるものが、もう少しで無くなる」

「次郎どん、何とか、おぬしの力で、雨を降らせてくれぬか」

村の衆「このままでは、この地方は全滅してしまう。どうかどうか、力をかして下され」

次郎かっぱは腕組みして、村の衆の話をじっと聞いていた。

おもむろに次郎かっぱが口を開いた。

「この俺には、雨を降らす、力は無い」

「小鮎川の流れも細り、この俺も困っている」

「食べる物も少なくなり、日一日、悪くなっている」

その話を聞いていた、村の衆はがっかりして、その場にへたりこんだ。

吾助「次郎かつぱでも、だめか・・・」

しん〜と沈黙が流れた。

すると、次郎かつぱが口を開いた。

「一つだけ、望みがある」

「え！え〜本当か」

「どんな、望みじゃ、早く教えて下され」

「それは、飯山観音さまの裏、白山山頂にある白山池に住む白龍様に頼む方法じゃ」

「え、え〜、白龍さまかよ」

「でも、どうやって、頼むのじゃ」

「それは、この次郎かつぱに、任せてくれ」

「そんなこと、本当にできるのか？」

「そう、俺には出来る」

「さあ〜これから、呼びかけるから、下がってくれ」



次郎かっぱが頭の皿に手をやり、手を何回も回し、白山池に向かって、手を広げ、気合を入れた。

「えい～ 白龍さま、白龍さま、おでまし下され」

「白龍さま、白龍さま、この次郎かっぱの願い聞き届けくだされ」

村人は皆、正座をして、飯山観音さまの方角を見つめ、手を合わせた。

すると、だんだん風が強くなり、ごうごうという音が大きくなり、風とともに、青空に白い大きな、物が近づいて来た。

白龍であった。

天空に止まり、その鋭い目で、次郎かっぱを見つめた。

「次郎かっぱ、わしを呼んだか」

「何ようで、あるか」

「白龍さま、ご覧のように、地上は長い日照りで、カラカラに乾き、草木も枯れようとしています」

「どうか、白龍さまのお力で、雨を降らせて下され」

「小鮎川も、荻野川、相模川も流れが細り、百姓衆も田畑の作物が出来ず。そのうえ、田植えの時期に田に水が引けず、困りはてています」

「わたしの住む、小鮎川も流れが細り、食べ物の魚が上がってこず、困っています」

「どうか、白龍さまのお力で、雨を、雨を降らせて下さい」

白龍は天空にとどまり、じっと、次郎かっぱの話を聞いていた。

「よかろう、次郎かっぱ。おぬしの願い聞き届けてもよいが、しかし・・・」

「はあ～、何なりとお申しつけ、下さい」

「よし、それでは、申しつけよう」

「わしは、玉（ぎょく）を求めている」

「わしにふさわしい、輝きの玉を」

「え、玉（ぎょく）ですか・・・」

「出来るか、次郎かっぱ」

少し、間を空いて。

「はい、必ず輝きの玉を、お作りいたします」

「そうか、それは、上々、楽しみじゃ」

「待っているぞ、次郎かっぱ。さらばじゃ」

「皆の衆、聞いてのとおりじゃ、力を合わせて、「輝きの玉」を作ろう。」

吾助「でも、どうやって、作るのじゃ」

「この、おれに従ってくれ」

「それは、よいが・・・」

「よいか、皆の衆、あそこに見える、丹沢の山奥に水晶が沢山、眠っている山がある。そこから、大きな、上等な石を探して、ここに運んできてくれ」

「あとは、この俺に任してくれ」

吾助「そうか、それでは、皆の衆、水晶山へ出かけ、よい石を運んでこよう」

「まかしたぞ」

「急いで、仕度をしろ」

「ただちに、出かけるぞ」

飯山村の村人は荷車を引き、水晶山に出かけた。



翌日の夕暮れ時に荷車を引いた、村人が戻ってきた。

おおきな、水晶の原石を積んで、次郎かっぱの前に持ってきた。それはそれは、立派な水晶石であった。

「さあ、その水晶石を河原において下され」

「皆の衆は、土手の上まで、下がって」

次郎かっぱと、さちかっぱは、大きな水晶石をはさんで立ち、両手平を水晶石に向けた。

「水晶石よ浮かび上がれ！ 浮上せよ！」

すると、大きな、重い水晶石が少しずつ、浮かびあがり、頭上でピタリと止まった。

「水晶石よ、回れ、回れ。丸く、丸くなれ！」

「早く、早く、回れ、丸く、丸くなれ」

水晶石が回り始めた。だんだん早くなり、白い輝きを発し、ますます、早く回転続けた。

土手の上の村衆は正座して、両手を合わせ、祈った。

一昼夜、次郎かっぱ、さちかっぱは一心不乱（いっしんふらん）に念力を発し続けた。

「出来た！ 出来た！」

水晶石の回転が少しずつゆるやかになり、止まった。

吾助「何と！ 神々しい、輝く玉（ぎょく）であることか」

次郎かっぱ、さちかっぱが、手の平をゆっくり降ろした。

輝く玉（ぎょく）がゆっくり降りて、河原に着地した。

村の衆が降りてきて、輝く玉（ぎょく）に手を合わせた。

「さあ、出来た、出来たぞ。こん身の玉（ぎょく）ぞ」

「それでは、白龍様をお呼びいたすぞ」

次郎かっぱが手の平を飯山観音様に向けた。

「白龍様、白龍様、輝く玉（ぎょく）が出来ました。どうぞおいで下さいませ」

すると、だんだん風が強くなり、ごうごうという音が大きくなり、風とともに、青空に白い大きな白龍様が近づいて来た。

天空に止まった。

『次郎かっぱ、出来たか』

「どれ、見せてみる」

すると、「輝く玉（ぎょく）」は音も無く、天空に上り、白龍様がじっと、見つめた。

「う、う～う、すばらしい！」

「実に、すばらしい、わしが願っていたとおりの、玉（ぎょく）じゃ」

「うは、はは、は、よくやった、皆の者」

「次郎かっぱ、村の衆、おぬし達の願いききとどけようぞ」

白龍様は輝く玉（ぎょく）を口にくわえると、天高く飛び、
天龍となった。

すると、まもなく、大きな雨雲が次々とあらわれ、大粒の雨が降り始めた。

雨は三日三晩降り注ぎ、小鮎川、荻野川、中津川、相模川、付近の川、池を満たし、元の豊かな流れとなった。

田畑は元の緑をとり戻し、豊かな田園となった。

それからのちも、相模の国は日照りもなく、緑の平野となった。

次郎かっぱ、さちかっぱ、龍、あいかっぱの、親子のかっぱは、いつまでも村人から慕われ、仲良く暮らしました。

白龍様は相模の国の伝説となり、子々孫々まで、語り継がれ、

いまでも、「白龍の舞い」として、受け継がれている。